

ドル円相場 サイクル分析

～ギャン理論から見た通貨～

ギャンアナリスト 中原 駿

【長期相場サイクル分析】

過去、当欄ではギャン理論に基づいて何度かドル円相場の分析を行ってきたが、今回はこの金融版投資日報でサイクル分析を、10月11日付の商品版投資日報でシンセティクス分析を行う。ご興味の方は、併せてお読みいただければ幸いです。

① 17年サイクル(仮)

ドル円相場の長期相場サイクルには、17年サイクル仮説(あるいは16～18年)が有効である。

1970年代以降、このサイクルは都合3回観察された。1960年前後(おそらくはドルの歴史的ピーク)から78年、78年から95年、そして95年から2011年10月(あるいは11年3月～12年9月にわたるトリプルボトム)の3つである。

戦前から戦後にかけておおよそ100年、米ドルは上昇してきたが、1960年代末からは一転3度にわたる長期円高(ドル安)サイクルを展開してきた。超長期にドル高としても、100年上昇に対し50年の下落は調整としてもおかしくはない。

そして、戦後の円高17年サイクルは未だドル高には転換していない。戦後の第1サイクルのピークは363円でボトムは178円。第2サイクルのピークは223円でボトムは79円。そして95年からの第3サイクルのピークは147円でボトムは75円。つまり全てのサイクルの天底が切り下がっている。

通常、サイクルは3つか2つのサブサイクルで構成されるが、上記3サイクルは全て、3つの5.5年サイクルで構成されている。また3サイクルとも全て、最後の5.5年サイクルで日柄が歪む。

上記の第3サイクルを例にとると、第一5.5年サイクルボトムは1999年11月でほぼ5年。第二5.5年サイクルは05年1月の101円で5年強。しかし第三5.5年サイクルはボトムまで81カ月(6年9カ月)の日柄を要した。延長(即ちサイクルが歪んだ)こと自体が、超長期サイクルの終焉を意味している。

② 5.5年サイクル

現行17年サイクルの起点は2011年10月である。同時にそれは第一5.5年サイクルの起点でもある。通常、内包する第一、第二サイクルは歪まない。よって5.5年前後の日柄が重要になる。

完全に確認できるドル円相場の5.5年サイクルは過去5回観察された。この5回全て、第一サイクルは強気。「サイクルの序盤は常に強気」というのはサイクル論のセオリー通りである。

現行5.5年サイクルは恐らく2015年6月5日にトップアウト。過去の第一5.5年サイクルの下げから想定される下落期間は15～16カ月(想定レンジ12～19カ月)、下落率は20～32%、全上昇に対する調整率は55～70%となる。これを15年6月を起点にすると相場は「2016年9月～11月」までに「85.58～100.68%」の下落率で、「90.65～97.94円(フィボナッチリトレースメントで100.70±5.93円)」の調整があると予測出来る。

現時点では値幅は想定レベルに入ってきた。しかし日柄はまだボトム形成場面としては若い(今月でちょうど5年)。

5.5年サイクルのレンジは66カ月±12カ月であり、11年10月を起点にすると、2017年3月を中心に2016年3月～2018年3月がターゲットの時間帯。現在はこのターゲット時間帯の前半にある。そこで、相場サイクルを更に細かく見る必要がある。

5.5年サイクルは、2つの33カ月サイクルに分割できる。

最初の33カ月サイクルボトムは2014年2月と見る事が出来るが、この年の線形はダブルボトムになっている。

年間安値は2月(28カ月目)2番安値は5月(31カ月目)。従って日柄的には5月だが、値位置的には2月となる。筆者はボトムにして現行33カ月サイクルの起点を14年2月と見る。今月はここから32カ月目。ただ6月のBREXIT騒動時の安値は起点から28カ月目なのでここがボトムであったかもしれない。ただ、週足レベルで見るともう一つの可能性が出て来る。

【プライマリーサイクル分析】

33カ月サイクルは144週サイクルと換言することも可能で、4～5つの33週(レンジ24～40週)のプライマリーサイクル(以下PCと略)か、3つの11カ月サイクル(あるいは48週:レンジ40～56週)で構成されていると見る事が出来る。



先述の通り、14年2月から11カ月サイクル3つで進行していると考えれば、6月安値まで45週、36週、43週と安値をつけて33カ月サイクル、ならびに5.5年サイクルはボトムを形成。現在、ここから新サイクルに入っていると見ることは出来よう。

しかし、このサイクル位相で見ると、第二位相が36週で終わっており、日柄が少なくとも4週足りない。また、最終位相がまだ底打ち完了となっていない可能性もある。長期サイクルボトム形成時、内包するサイクルは歪む。延長の可能性は否定出来ない。

では、33カ月サイクル内に4～5つのPCが入るという見方ではどうか。この見方だと、14年2月から36週、30週、36週と安値をつけ、今年1月20日の安値から6月24日の安値までは22週とこれも日柄が若い。筆者はこの8週間後の8月16日に30週目でPCボトムをつけたのではないかと見ている。通常のPCレンジでは10月24日の週まで有効だが、いずれにせよこれで4つ目のPCまでは確認が出来ている。

繰り返すが、長期サイクルボトム形成時、内包するサイクルは歪むので、もし相場サイクルが標準の長さから延長気味に終了する場合、PCレベルではもう1つ、5つ目のPCが入るとみるべきであろう。その場合、ターゲットとなる日柄は2017年2月(2016年10月～17年3月)である。

一方、まだ4つ目のPCボトム時間帯は10月24日までであるので油断は出来ないものの、長期サイクルが4つのPCで構成されるなら、ここから大幅に上昇するはずである。

そうでなければ、ここから長期サイクルボトムの影響も受けた第5PCのボトムに向けた急激な下落が第5PCの天井場面から起こる可能性があるだろう。

詳しくは商品版をご覧ください。シンセティクスの観点では、第5PCの可能性が示唆されている。もしその場合、最後のだめ押しともいえる急落が今秋から翌年初にかけて起こる可能性が高い点という点には注意したい。ターゲットは92±7円である。

テクニカル

重要ギャップ健在

NYダウ平均を注目しているが、まだ答えは出ていない。

今回は雇用統計が大いに関係してくるだろう。為替市場を見ると、既に12月利上げを織り込みに来ているようだ。

ドル円は100円台から始まり、木曜日で8連騰。この間、日経平均は4連騰で終わり、週末は前日比マイナスで終わっている。雇用統計が良ければ、12月利上げが一気に現実味を帯びてくる。ただダウ平均がこれに対して、景気の良さに注目して上げるのか、利上げに悲観的になるのかはわからない。

材料はどちらでも相場の動きによって後付けできる。同様にテクニカルもそうだが、こちらは9月9日のギャップダウンを上値抵抗として、下値18000で保合いに入っている。

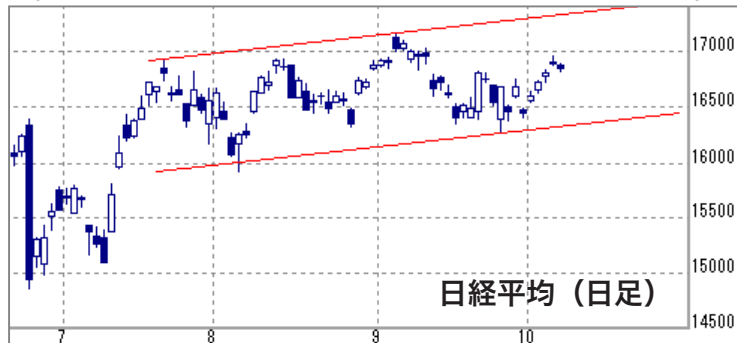
テクニカルでは18000割れは大陰線を伴う下げを示唆するが、上値もギャップダウンを上抜けると強気に転換する。

方向性はある程度読めるのだが、現在の位置づけはやはりどちらにでも動く可能性があり、それはまた大きな値幅を伴うことを示唆する。

こうなると日経平均も影響を受けよう。利上げの確率が高

まれば、ドル円上昇と日経平均の上昇がセットアップされるが、逆にダウ平均が急落が発生すれば、日経平均も下がる。

今週は日米月曜日が祭日。火曜日以降となるが、ダウ平均についていくのが良いだろう。ダウの18,000割れは日経平均の7月後半から続いている上昇チャネルライン下限を目指す。一方でダウ平均の9月のマドを引け値で埋めてくれば、17,000オーバーを狙う。先週述べたダウ平均の警戒すべきフォーメーションは18,400を超えてくれば、杞憂で終わる。今週は様子見とする。ただポイントは先週掲載のダウのチャートが語っている。



今週の押し エネルギーは溜まっている

対ドルでユーロと金は連動性があるとされている。ただ、ここ最近では別の路を歩んでいる。先週金は大きく崩れた。一説ではファンドのストップロスが決済の誘爆を招いたとの話も。ここにフィンテックの功罪が見える。もはや素人は短期売買では絶対に勝てない。先週はポンド相場でも不可解な変動があった。

一方、ユーロドルは非常に狭いレンジで推移している。ここ1カ月は1.12を中心に0.01の上下変動。昨年1月から見ると1.05～1.15のレンジ相場。しかし、週足レベルで見ると上値は1.15付近が抵抗線として強固なのに対し、下値は今年に入ってからじりじりと切り上げている。これはいわゆる「アセンディングトライアングル」と呼ばれる線形で強気シグナル。仮に今も金とユーロに連動性があって、片方が崩れるなか、もう片方が崩れていないのであれば、後者は相当なエネルギーを貯めている。最近では穀物相場で見られたが、長保合いは放れると大相場になる。ユーロは今週、その準備段階に入るのではないかな。

ユーロドルに関しては先週“39日移動平均線が強力なサポートに。この付近は買い場になっている。また、6月以降の狭い幅での天底は軒並みダブルボトムかダブルトップになっている事から、相場は目先8月高値と面あわせ、つまり短期的なダブルトップを目指すのではないかと筆者は見ている”と記述。6日、相場は引け値で39日線を割り込むも、翌7日は9月米雇用統計のネガティブな結果を受けドルが売られ、ユーロは反発。再度39日線を突破している。以前、当欄では日足レベルでの安値の日柄が23営業日±4営業日と指摘したが、先週末の1.1103は8月31日の安値1.1123から27営業日目であり、今週はユーロ高のターンになると見ている。

相場が1.1100を割り込む事なく反発した点は強気要因として大きい。ここは目先の強力な下値支持線であった。今週、相場が23日移動平均を上回ると8月からの上値抵抗を突破し、少なくとも1.4、米国経済にネガティブなニュースが入れば1.5を試す展開があるのではないかな。故に今週も押し目買い方針である。

その一方で、引け値で1.11を割り込むと相場は1.10を目指すそう。ただ1.10を割れない限り中長期的には強気見通しである。

今週の主な予定・経済統計

10月10日(月)

- ・【日本】体育の日で休場
- ・【米国】コロンブスデーで為替・債券市場は休場
- ・ユーロ圏財務相会合

10月11日(火)

- ・EU財務相理事会
- ・10月の独ZEW景況感指数

10月12日(水)

- ・米3年債入札(240億ドル)、10年債入札(200億ドル)
- ・米FOMC議事録公開

10月13日(木)

- ・週間米原油在庫(10月1日の週分)
- ・米週間新規失業保険申請件数(前週は24.9万件)
- ・米30年債入札(120億ドル：入札合計は560億ドル規模)

10月14日(金)

- ・9月の米卸売物価指数(前月比0.2%上昇予想、前月は横ばい)
- ・同コア指数(前月比0.2%の上昇予想、前月は横ばい)
- ・9月の米小売売上高(前月比0.6%上昇予想、前月は0.3%低下)
- ・8月の米企業在庫(前月比0.1%の増加予想、前回は横ばい)
- ・10月の米シガン大消費者信頼感指数(92.0の予想、前月は91.2)
- ・イエレンFRB議長、講演



今週の相場風林語録

換金性と流通性の高い商品は、常にインフレの尖兵である
尖兵(せんぺい)とは大部隊の一番先頭を少数の兵隊を先行させて敵情を調べる

今週の**九星★波動**

南雲 紫蘭

政治の季節

政治の季節がやってきました。先月までの中央銀行の金融政策というファンダメンタルズあるいは伝統的シナリオに基づいた「ある程度読める」世界から「混沌して誰も行方が分からない」世界への転換ともいえます。政治がいかに混沌として読めないか、という点に関してはプレクジットがいかに雄弁に語っているわけですが、想定外のシナリオが米大統領選挙にも起こるとなると、もしかしたら300年続いたアングロ・サクソン帝国（英米覇権の歴史）の大きな転換点になるかも知れません。

そしてもしそれが現実になるとすれば、トランプ氏が大統領となり、アメリカはもう一つの伝統ともいべき孤立主義（モンロー主義）へ回帰することになります。

世界中であらゆるところで介入を続けていた米国が一国主義となるインパクトは強大かつ深刻です。本邦にその準備が出来ているとは到底思えません。

トランプ大統領誕生でドル安シナリオを描く相場参加者は、

相場指南道場

トレーダーあすなろ物語 (365)

中原 駿

1980年代のアメリカは今にして思えば、矛盾と困難にあふれていた。第二次石油ショックの影響からハイパーインフレと不況のダブルパンチ＝所謂スタグフレーションに陥っていた米国は、まず強力な金融引き締めでインフレを退治した。

インフレを退治したのは良かった、しかし強烈な副作用が。2桁まで到達した金利の魅力で、世界中のマネーがアメリカへ集中した。ドル資産への需要が伸びるとともに、ドル相場は対マルクで最高値を更新し、対円でも大きく値を上げた。

ドル高の必然として輸出は大幅に減少する一方、輸入は大幅に拡大し、巨額の貿易赤字をもたらした。

第六感の 第3の山を越した

テクニカルアナリスト 葛城 北斗

ドル円相場山岳部、今週は下山中。

ドル円相場は9月27日ほぼ100円から上伸、8連騰して6日104.15まで買われた。

しかし7日発表された9月の雇用統計は市場予想を下回る内容となり、ドル円相場は下落。102円後半で取引を終えた。

雇用統計の非農業部門就業者数は15万6000人。これは市場予想17万2000人増を若干下回ったが、労働市場が大幅に悪化していることを示す兆候は全くない。

ただ、失業率と労働参加率がともに上昇し、賃金の伸びは引き続き緩やかであることを考えると、労働市場にはスラック（需給ギャップ）がまだまだ残っていると言える。

ドル円相場は雇用統計前に良好な数字を織り込んでいたことからその反動が来ただけで、市場のコンセンサスは12月に利上げシナリオは崩れていない。

テクニカル的にはドル円相場は先週述べた如く、「やや下値が切り上がるもディセンディングトライアングル。上値は切り下がっている。客観的に見れば、現在3つ目の山に向けて103円台を狙っていると見るが、それは2週間前述した通り」。

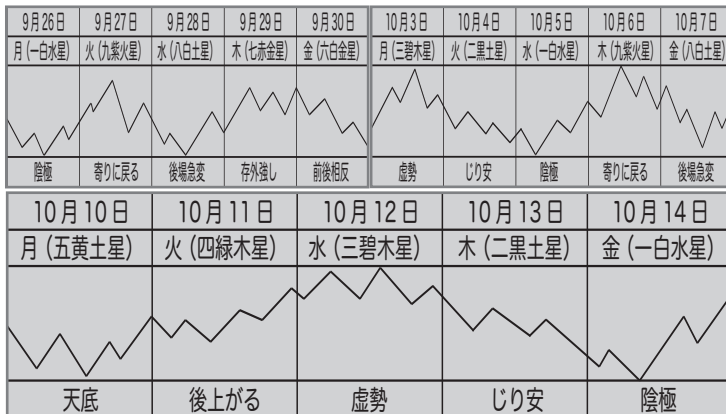
相場は104円台まで上伸したがこれで3つ目の山を完成したと見る。5年サイクルボトムに向けた最後の下げがあるかどうかだが、あるとすれば次に下値100円割れに突っ込んできた時はその証となろう。それまでは依然としてトライアングル内の推移に留まる。

どうもそのところを誤解しているように思えてなりません。

トランプ大統領の出現は、安全保障も含めて円が大暴落するきっかけとなる、と見るべきでしょう。

さて月盤は8日から《三碧木星》です。《四緑木星》が想定通り円高推移したことを考えれば、突っ込む星ではありません。

ただし、その後は冷静になることも大切です。



同時に引き締めによって、米企業の民間投資は大幅に落ち込んだ。貿易赤字を主因として米国の国際収支は大幅な赤字となる一方、企業収益の落ち込み、投資の落ち込みから、財政収支も大幅に悪化、赤字を累積していった。

結果、高名な「双子の赤字」の状況となった。

もちろん、現在のアメリカに関しても「もう終わりだ」といった本が出ないわけではないが、この当時、本邦の書棚には米国落日、米国の終焉、などといった見出しが躍っていた。

それほど米国の状況は深刻であったのだ。

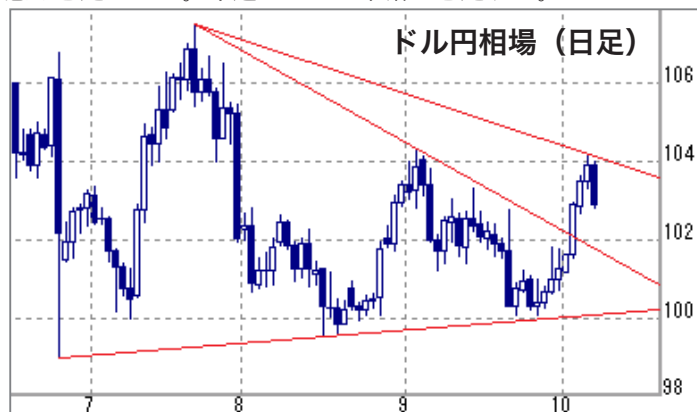
米国はインフレが沈静した後、金融緩和を本格化させた。

しかし、この金融緩和は劇薬であった。景気は回復し始めたが、貿易赤字増大は歯止めがかからなかったのだ。

先週は積極的な投資家は3つ目の山を狙い撃つ準備をしていたが、次の通りコメント「目先のストラテジーは積極的な投資家は10月、103～105円台あれば売りから入り、5年サイクルボトムに向けた最後の下げを取りに行っても良い。100～95円では一般の投資家同様、今度はロングを狙う。それは11月以降になるかもしれない」。

ショート参入された投資家は105円以上の引け値にストップを置き、102円台から100円台では順次利食いを狙っていくのが良い。

今年後半はまだまだ不透明な材料が残され、特に大統領選は不明だ。トランプ氏となればドルも株も急落するだろうとした見方が支配的。逆にクリントン氏が勝利すれば通常なら12月利上げを見越して、ドルは上昇との見方も一般的であるが、ここで株の下げが大きくなれば、利上げ延期、ドル下落という事態も想定される。今週はドルの下落を想定する。



サイクルだけ話します。

— メリマン・サイクル理論 備忘録 —

【第 10 回】米ドル指数のサイクルについて (2)

米ドルに関連して先週ご紹介した「大統領サイクル」ですが、10月のMMAサイクルズレポートでは更に踏み込んで、大統領選に勝利する政党のサイクルについて解説しています。

過去の『フォーキャスト』の中でも解説していますが、メリマン氏によると米大統領選には強力な政党サイクルが存在しているとの事。民主党も、共和党も16年周期で大統領を輩出しています。ただ、過去の当連載をご覧の方はお分かりのように、長期サイクルには歪みが生じます。

両党の大統領勝利サイクルは 1928 年と 1936 年に一度ずつ崩れました。この 2 つの時間帯は共に世界大恐慌と関係します。今回の大統領選は順当に行けば共和党が勝利するのですが、サイクルが崩れて民主党が勝利すると、ひょっとすると 100 年近く前の大恐慌のような、その後の第二次世界大戦につながるようなパラダイムシフトの扉を開けてしまうのかも知れません。

メリマン通信 — 金融アストロロジーへの誘い —

今週は「太陽トランスレーション」

先週末発行された10月のMMAサイクルズレポート、更に今週発行されたMMA日経週報を初めとする週刊レポート。これらの記述の中でメリマン氏が注目している10月の天体位相は「2つのトランスレーション」であるという。このどちらか、もしくは両方で突発的な反転相場の可能性を示唆している。

1つ目は「太陽トランスレーション」で10月7～15日（日本時間8～15日）、2つ目は「火星トランスレーション」で10月19～28日（日本時間19～29日）を指す。前者は7～8日にかけて形成される太陽・冥王星スクエアと15日に形成される太陽・天王星オポジション（180度）までの時間帯で、この間3惑星がT字スクエアの関係になる事を重要視している。

実際、7日付近の時間帯については当欄でも先週指摘していた“…直近の相場の節目になりやすい時間帯を加えるなら、日

当然きっちり 16 年とはいきませんが、ドル指数にも 16 年サイクルが存在します。また、月足をカウントすると、どの相場にも 16 ～ 18 年程度のサイクルは存在するようです。

『フォーキャスト 2016』ではドル指数の長期サイクルを 16.5 年と定義しています。本の中で提示している 16.5 年サイクルは 1978 年（筆者の所有データでは見確認）、1992 年（9 月 2 日の 78.19 で 14 年強）、2008 年（3 月 17 日の 71.15 で前ボトムから 15 年 6 カ月）とあります。

ドル指数は絶対評価なのですが、通貨市場は相対評価なので安値サイクルだけでなく、高値サイクルも存在。この長期サイクルは起点から7～9年目にトップアウトしている事が判っているので、2008年から始まった現行16.5年サイクルは2015～2017年にトップアウトする可能性が示されていました。

実際、現時点における高値は2015年12月2日の110.51。従ってここが現行16.5年サイクルの天井であったかもしれません。ただこの相場は大統領選の影響を強く受けます。来月の選挙の結果次第ではダブルトップか新高値更新の可能性もあります。とはいえ、既に上げの日柄が限界に來ている事だけは確かです。本時間6日(木曜日)の火星・木星スクエア(90度)付近か。火星はいくさの星、木星は“拡大”の星である。翌7日(金曜日)は水星が天秤座でサインチェンジ。つまり、今週木曜から金曜にかけマーケットは水星逆行シャドウ期抜けの時間帯と重なる。更に9日(日曜日)は上弦の月。奇しくも今週末は9月米雇用統計と重なるので。今週末は8月末からの水星逆行の最終局面の影響を受ける可能性に注意しておく必要があるだろう”。

市場予想に反し9月雇用統計はネガティブな結果に終わった。今週の相場は先週の相場の流れと逆の動きになるのではないかと、そこから太陽・天王星オポジションの時間帯で再度反転するのか、それとも相場が加速するかは星回りからは判らない。各相場の日柄やテクニカル指標と併用して判断するほかない。

以前も指摘したように 10 月の天体位相は 9 月に比べると単体で相場の方向性を左右するような強力なものはない。裏返せば、ここで紹介した時間帯で反転を繰り返し、結果、種々の相場は総じてボラティリティの高い展開になると筆者は予測する。

WE Bサイトより一足早く、1週間分まとめ読み！！

今週のastroロジー info

10月10日（月） 情報高速化時代、噂での仕掛けはもう遅い

10月11日(火) N字、逆N字三波動、荒れる市場

10月12日(水) 来週月曜日まで材料噴出

10月13日(木) 上下小刻みな動き

10月14日（金） 加速に注意、伸びたところを逆張り狙い撃ち

10月15日（土）相場は恐怖と欲のバランス

10月16日(日) 罫線と材料が逆行する時は注意



世界**No.1**
ヘッジファンドの
マクロ経済分析

マーク・ファーパー博士の
月刊マーケットレポート
The Gloom, Boom & Doom Report
ヘッジファンド巨頭がたびたび記録した男が、世界市場のマクロ経済を読み解く



世界**No.1**
ヘッジファンドの
マクロ経済分析

「グローム・ブーム・ドゥーム」(GBD)とは、景部、上景、破綻を意味している。GBDレポートは全世界のエンビロメント投資機会に着目した格別フィナンシャルレポートである。ホフヴィウスの議論の言葉とおり、現在のところには分けてよくあり、得意の地盤にある者はすべて没落する。カネの投資チャンスである。本レポートの目的は特定の投資アイデアやスキームを分析、歴史、そして社会的なトレンドを投資家に警告を発して、短期、中期投資戦略と次の投資チャンスを提供することである。購読者は、特に金融環境、金糸、そして市場で、多くのさまざまなセクターに投資できる資産と環境である。これは、金融、資源、商品、不動産などいろいろな分野に投資を推奨してきたが、多くの購読者にも受け入れられている。

【 配信方法 】 電子メールにて月 1 回配信 (最新版は毎月 15 日頃に配信)
 【 料金 】 1 か月 本体 10,000 円 (税込 10,800 円)
 ※このレポートは、お客様が解約し続きを行なうまで自動継続されます。
 【 販売・配信 】 Traders Shop / ハンローリング株式会社



世界**No.1**
ヘッジファンドの
マクロ経済分析

お申し込みはこちらの短縮URLから [Treaders Shop](http://TreadersShop.com) お申し込みページ

<http://goo.gl/6efiPM>